



「福江島・堂崎天主堂にて」



## センター長報告

### 一神教の受容プロセス

NHK大河ドラマ「八重の桜」をご覧になっているだろうか。8月からは八重の京都時代が始まり、八重と新島襄との出会いや、同志社の草創期が描かれている。私は「建学の精神とキリスト教」という担当科目の中で、新島襄の生涯や同志社の歴史について教えてきたので、「八重の桜」が、19世紀後半の京都や日本をどのように描くかに大きな関心を寄せている。

先日見た番組の中では、同志社の設立にあたり、耶蘇（キリスト教）の学校ということで、新島や宣教師が、京都の仏教界や住民から強い反発を受けている場面があった。誇張した演技を含むとはいえ、ドラマの中で、新島は僧侶に突き飛ばされ、地元住民からは「出て行け」とどなられ、惨憺たる有様である。新島たちも京都でキリスト教の学校を作ることがいかに大変であるかは覚悟の上であった。日本の文化と宗教を牽引してきた京都において、その伝統を守ることは、時として、侵入する異質なものを排除することと表裏一体であった。ところが、同志社英学校が開校された1875年から138年たった今、同志社は京都の土地にしっかりとなじんでいる。仏教界との関係も決して悪くはない。この間、幾重もの緊張や葛藤があったことは言うまでもないが、時間をかけて京都の風景の中にキリスト教が受け入れられていった事実は大変大きい。

キリスト教の日本社会における受容を考えると、今年3月、ゼミ旅行として学生たちと出かけた長崎が思い起こされる。豊臣秀吉によるキリスト弾圧が強まる中、京都および

大坂で捕まえられたキリスト教徒たちが長崎まで歩かされ、そこで処刑された。1597年のことであった。彼らは二十六聖人として知られているが、それ以降、キリスト弾圧は全国的に強まっていく。

長崎港から西に100キロの位置に五島列島がある。フェリーで渡った後、学生たちとレンタカーに分乗し、主に五島南部の福江島の教会をめぐった。そこでもキリスト教徒の苦難の足跡を見ることができた。しかし、それだけでなく、明治期にはこの島が、異国文化が流れ込む、異世界へのゲートの役割を果たしていたことを、驚きをもって知ることができた。目下、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の世界遺産登録（2016年以降）を目指す取組みが長崎県を中心に進められている。こうした取組みが、日本社会が異質な文化や宗教とどのように出会ったのかを真摯に考える機会につながればよいと思う。

京都でも、最近、興味深い動きがある。イスラム教徒が食べても問題のない食材や料理法を用いた「ハラール」料理を提供するよう、ホテルや飲食業界が取り組みを始めた。もちろん、この背景には東南アジアからの観光客誘致というビジネスの動機が大きいのであるが、文化的・宗教的な他者に対し、どのような「おもてなし」を提供できるかを考え始めたのは、大きな意義があると思う。小さな一歩を積み重ね、軽率に相手を判断せず、時間をかけて付き合うことによってこそ、他者の受容を促し、新しい文化の形成につながっていくからである。（一神教学際研究センター長 小原克博）



公開講演会

シンポジウム

研究会

報告

日本オリエント学会共催 公開講演会

## 「アマルナ」前夜のエジプト

## —アメンヘテプⅢ世治世末期のテーベ

主催：日本オリエント学会

同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）

共催：同志社大学神学部・神学研究科

【講師】近藤二郎（早稲田大学教授、早稲田大学エジプト学研究所所長）

【日時】2013年2月9日（土）13:00 - 15:00

【会場】同志社大学今出川キャンパス 神学館礼拝堂

アテン神を唯一神とする宗教改革は、アマルナ革命と称される。アメンヘテプⅣ世は、自分の名をアクエンアテン（アテンに有益なる者）と変え、太陽神アテンの一神教の信仰を確立した。その後、モーセがユダヤ教を誕生させたことが「出エジプト記」に見られるが、その前身はアテン信仰ではないかということが注目されている。アテン賛歌と詩編の類似性など、キリスト教との共通性に関して多くの研究がなされてきた。

6年前にアメンヘテプⅢ世治世末期のウセルハトの墓が発見された。近藤氏自身も携わった発掘調査を通じて、アマルナ時代の社会がどうであったのか、アマルナに遷都する前のテーベはどのような状況であり、アメンというテーベの神はどのような神であったのか、強大な力をもつようになったアメン神官に対してアメンヘテプⅢ世はどのような運動を起こしたのか、これらの点について、近藤氏は現場のスライドを駆使しながら話された。

アメンヘテプⅢ世の時代は、第18王朝後期の後半という時期に属する。ハトシェプスト女王は、エジプトにはめずらしい女性の支配者であったが、実は、第6王朝、第12王朝、第19王朝の最後、プトレマイオス朝最後のクレオパトラも女性の支配者であった。ハトシェプストは王朝の最後ではない女王であった。ファラオ（王）は男性であったが、男王でうまくいかなくなって最後の手段として女性を王として立てたのではないだろうか。

アメンヘテプⅢ世は紀元前1350年頃に治世が終わり、次のホルエムヘブの治世が始まるまでの31～32年間に4、5人の王がいたはずであるが、王名は抹殺され、55号墓の王名も削りとられている。ヒョウの毛皮を着て葬儀をつかさどる人物が王の後継者とされていたが、アイ王

も王名表から抹殺され、ツタンカーメンの腹心の将軍が王になったホルエルヘブ王となっている。ツタンカーメンの前に女性の支配者がいたと考えられる。アクエンアテンの娘のメリトアテン王妃であろうか。第18王朝のアマルナ時代は唯一神信仰の大きな時代であったが、この時代はないものとされ、歴史が断絶している。

ライオンの女神の像が世界中にある。アメンヘテプⅢ世の時代のセクメト女神像がルクソール神殿から出土した。セクメトは、北の港の守護神プタハの妻、その子がネフェルテムである。他にも、オシリス（父）・イシス（母）・ホルス（子）、アメン神（父）・ムウト女神（母）・コンス神（子）のように、なぜ女神がライオン顔なのか不思議であるが、主神、その妻として力ある女神、他に力ある神を子としている関係がある。

アマルナ時代はよく、特異な唯一神教の時代で、その後、元のアメン信仰に戻っていったと考えられているが、実際はそうではなく、アメンヘテプⅢ世時代からアメン信仰だけではなく、メンフィスのプタハ信仰、太陽信仰、そういうものがアマルナのアテン信仰のもとにあった。テーベのアメン信仰があまりにも強大になり過ぎたために、それを北の対抗勢力を使って牽制する動きが起こってきた。現在はプタハ神殿の破壊された跡しか残っていないが、北のメンフィスにあったプタハ大神殿と南のテーベのアメン神殿がほぼ同じ規模で造られていた。テーベのアメン神官を牽制するためにプタハ神官が使われ、アメン神官のなかにもプタハという名をもった人がいた。

エジプト全土の神官長を王が任命してアメン神官が暴走しないように、さまざまなことが行われた。その一つは、ライ





オンの女神・プタハの妻の姿をテーベの神殿にも造るという非常に不思議なことを行ったことである。

なぜアマルナがメンフィスとテーベの中間なのかというと、メンフィスとテーベというほぼおなじ旧い伝統的勢力を排除、相殺するためであったと考えられる。アマルナ時代が過ぎたあと旧態に復したのではなくて、アマルナ時代は「ターニングポイント」として考えられる。アテン信仰はもともと何であったのか。アメン信仰があまりにも強くなり過

ぎたため、それを初期化してテーベとメンフィスのバランスをとるために、という極端な唯一神信仰を導入したのアテンではないか。ただ、それはうまくいかなかった。アクエンアテンという人が狂信的であったので、アメンつぶしとは違った方向に行ってしまった可能性がある。

(CISMORリサーチ・アシスタント 佐藤泰彦)

## 国際会議

# Peace and Security in the Middle East : Alternative Ways to Democratization

(中東の平和と安全保障—民主化への道程を再考する)

主催：科学研究費補助金『中東における紛争防止の学際的研究の構築』  
(研究代表者：中西久枝)  
同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)  
共催：同志社大学グローバル・スタディーズ研究科

**【講師】 立山良司 (防衛大学校教授)**

**Peter Wagner (Research Fellow, Hungarian Institute of International Affairs)**

**Norman Cook (Former Executive Policy Director in Charge of the Middle East and Africa at CIDA, Advisor to the Project “Conflict Prevention in the Middle East”)**

**Nurşin Ateşoğlu Güney (Professor, Yıldız Technical University)**

**【モデレーター】 中村覚 (神戸大学准教授)**

中西久枝 (同志社大学教授)

**【日時】 2013年2月16日 (土) 9:30 - 16:15**

**【会場】 同志社大学烏丸キャンパス 志高館101教室**

2013年2月16日、“Peace and Security in the Middle East” (中東の平和と安全保障) と題して、国際会議が同志社大学にて開催された。

はじめに、本会議の司会者を務める中西氏が基調講演を行った。中西氏によれば、この国際会議は、科学研究費補助金である「中東における紛争防止の学際的研究の構築」という研究事業の成果報告の場として開催された。この研究事業は、中東から北アフリカの地域における紛争防止を探ることを目的とし、主に以下の3点から研究が行われた。第1に、アフガニスタンおよびパレスチナの安定化である。特にこれら地域で対立する諸政党間の調停が目指された。第2に、対象地域における地域間協力と紛争沈静化のた

めの枠組みについての調査である。この調査は、対象地域に強く影響を与えているアメリカやEU、ロシアや中国等の外国勢力との関係という観点から行われた。第3に、ペルシャ湾の安全保障についての調査である。この調査は、この地域における人権問題、サウジアラビアの役割、イランをめぐる核技術の問題の観点から行われた。そして、今後さらに調査が必要な課題として、これら地域において、政治・社会・経済資源が、国家機構だけでなく、地域のまたは国際的なNGOによっても分配されていることについてさらに調査することが必要であるという。

この基調講演に続いて、4名の研究発表が行われた。一人目の立山氏の発表題目は、“Failure of the Isolation Policy against





Hamas”（ハマスに対する孤立化政策の失敗）であった。イスラエルは、2006年以来、ガザ地区を約6年にわたって封鎖してきた。また、アメリカや日本を含む各国も、ガザ地区を支配するハマスに対して、経済制裁や外交断絶を行ってきた。しかし、この孤立化政策は、ハマスの支配体制を弱めるどころか、逆にその支配体制の強化につながっているとされた。そして、孤立化政策の失敗の原因を、国家と非国家という非対称の関係における紛争の典型例である点から考察した。

二人目のWagner氏の発表題目は、“Preparing for the Endgame in Syria: Lessons Learned from EU and NATO’s Involvement in the Syrian Civil War”（シリア内戦を最終段階に至らしめるための立案—EUとNATOによるシリア内戦への取り組みからの教訓）であった。EU諸国やNATOによるシリア内戦への取り組みの背景を、EU内の各国の政治的思惑の違いや、アメリカのEUに対する協力の必要性などから分析した。その上で、EUとNATOが用いることのできるシリア内戦解決のための手段を明らかにした。

三人目のCook氏の発表題目は、“Conflict

Escalation and the Reshaping of Foreign Policies toward the Arc of Conflict”（紛争の弧における紛争の拡大とその地域に対する外交政策の再形成）であった。チュニジアからシリアに至る地域における紛争の拡大に関わる外交政策について、主要国や各国際組織の対応を考察した。過去2年にわたる当該地域における紛争の拡大と深化の過程で、外交政策のための新しく優先すべき課題や原則が生まれてきたとした。そして、アメリカとヨーロッパ諸国との間における当該地域への外交政策の協力や対立などの変遷過程を踏まえて考察が行われた。

四人目のGüney氏の発表題目は、“Turkey’s Nuclear Policy in the Face of Iran’s Debatable Nuclear Program”（イランの核開発に直面してのトルコの核政策）であった。トルコ政府がもつ核政策を分析し、その特徴と課題について述べた。

また、質疑応答も各発表において活発に行われ、最後に再び中西氏による総括が行われ盛況のうちに終了した。

（CISMORリサーチアシスタント 藤本憲正）



## The International Conference on Values in Religion （宗教における価値観をめぐる国際会議）

主催：カイロ大学オリエント研究センター  
同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）

【CISMOR出席者】 小原克博（同志社大学教授、CISMORセンター長）  
岩本明美（鈴木大拙館主任研究員）  
Samir Nouh（同志社大学教授）  
塩崎悠輝（同志社大学助教）  
竹内裕（熊本大学准教授）  
月村太郎（同志社大学教授）  
石合力（朝日新聞中東アフリカ総局局長）

【日 時】 2013年2月19日（火）～ 20日（水）

【会 場】 エジプト・カイロ大学

国際会議“Values in Religions”（諸宗教における価値）は、CISMORとカイロ大学オリエント研究センター（Oriental Studies Center）の共催で、2013年2月19日と20日の2日間にわたり、エジプトのカイロ大学で開催された。カイロ大学は、エジプトでも有数の歴史を誇る国立大学であり、東洋学研究所では、ヘブライ語、ペルシア語、ウルドゥー語等の言語学習とともに

に、語学を活用した様々な領域での地域研究が行われている。CISMORと東洋学研究所の共催で国際会議がカイロで開催されたのは今回が初めてであるが、これまでも学術誌*Japanese and Oriental Studies*（日本学・東洋学研究）を共同で発行する等、研究における継続的な協力関係がある。

諸宗教における様々な価値のあり方を

テーマとした今回の会議では、CISMORとカイロ大学の他にもエジプトの10大学、アラブ首長国連邦、アルジェリア、クウェート、サウジアラビアからの発表者が参加した。初日のカイロ大学副総長を迎えての開会式につづき、初日に4つ、2日目に6つのセッションがあり、合計49の発表があった。キリスト教、イスラーム、ユダヤ教、ゾロアスター教、仏教、それに日本の宗教について、神学、宗教学の他、歴史学や文学等様々な観点から発表がなされた。神学や文献学の観点から各宗教の倫理観を分析する発表が多かったほか、イスラームとユダヤ教あるいはイスラームとキリスト教における倫理や価値観を比較した発表、詩や小説、格言といったテキストや図像の分析を通して各宗教の価値観を考察した発表もあった。

CISMORからの発表者は6名であり、それぞれの発表タイトルは、小原氏“Formation of the Modern Values in Japan through Religion and Secularity”（日本における宗教と世俗性を通じた近代的諸価値の形成）、岩本氏“The Values of Buddhism in the Contemporary World”（現代世界における仏教の諸価値）、Nouh氏“Relation between Religious Values and Environment in Japan, an Islamic Vision”（日本における宗

教の諸価値と環境の関係—イスラームの観点）、塩崎氏“The Impact of Islam on the Japanese Wartime Policy during the Second World War: The Interaction in Southeast Asia”（第二次大戦期の日本の戦時政策へのイスラームの影響—東南アジアにおける相互影響）、竹内氏“Values in Judaism through Secular Eyes”（世俗的観点から見たユダヤ教の諸価値）、月村氏“Regional Conflict and Religion”（地域紛争と宗教）であった。また、CISMOR共同研究員で朝日新聞中東アフリカ総局局長を務める石合氏も会議に参加した。聴衆は日本における宗教研究への関心が高く、批判的な見解も含めて質問やコメントが相次ぎ、日本における宗教のあり方についての質問もあった。

会議は、連日およそ200名の聴衆が参加する盛況であった。複数のテレビ局からの取材があり、CISMORからの参加者も、日本の宗教や倫理、価値観についてインタビューを受け、エジプト社会で、日本社会の宗教や倫理が近代以降どのように変化しているのかについて関心が深いことをうかがわせた。

（同志社大学神学部助教 塩崎悠輝）



## 国際ワークショップ

日本学術振興会・頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム

# Shariah, Governance and Interreligious Relations

（シャリーア、ガバナンス、異宗教間関係）

主催：マレーシア国際イスラーム大学（IIUM）  
同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）

【発表者】 Haslina Binti Ibrahim (Assistant Professor, International Islamic University of Malaysia)  
Roslizawati Bint Mohd Ramly (Ph.D Candidate, International Islamic University of Malaysia)  
松山洋平（東京外国語大学大学院博士後期課程）  
Shafiq Flynn (Ph.D Candidate, International Islamic University of Malaysia)  
塩崎悠輝（同志社大学助教）

【日時】2013年3月1日（金）9:30 - 17:30

【会場】同志社大学今出川キャンパス 寧静館5階会議室

2013年3月1日、頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム「多文化共生時代における一神教コミュニ

ティ間の相互作用と対話」の一環として、国際ワークショップ“Shariah, Governance and Interreligious Relations”（シャリー





ア、ガバナンス、異宗教間関係) が開催され、5名の国内外の若手研究者によって発表が行われた。各発表の要旨は以下の通りである。

#### **Haslina Binti Ibrahim**

#### **Towards Good Governance of Plural Society in Malaysia: A Study on the Prospects and Challenges for a Successful Inter-Religious Dialogue**

(マレーシアの多文化社会の良好な統治のために一宗教間対話の実現にむけた展望と課題)

マレーシアにおける異なる人種やエスニック・グループの存在は、この国が多様性に富む社会であることを示している。しかし同時に、この状況が対立の潜在的原因となっていることも確かで、実際に、他宗教への無理解を原因とした抗争が発生している。そのためこうした抗争を減少させるためにも、異なる宗教の間を橋渡しする宗教間対話の必要性が確認される。

発表者によれば、最大の問題は、ムスリムが多数派を占める社会において、マレーシア政府が宗教間対話実現のためにどのような方策を取るべきなのか、国民は宗教間対話を行う準備ができているのか、そしてマレーシアの特殊性を考慮した時、実りある宗教間対話を実現するためにどのような課題が存在するのかという点である。

発表では、これらの問題を調査した結果として、マレーシアの国民の間では、宗教間対話の必要性は十分に認識されているものの、その意味の理解については不十分であること、そして、多数派であるムスリムは、非ムスリムに比べてこの問題への関心が薄いなどの今後の課題が指摘された。

#### **Roslizawati Bint Mohd Ramly**

#### **Applying al-Faruqi's Method of Meta-Religion to Understand Interfaith-Issues in Malaysia**

(イスマール・ファールキーの「メタ宗教」概念から見たマレーシアにおける異宗教間問題)

本発表のテーマは、イスマール・ファールキーの「メタ宗教」の概念を考察し、それを、マレーシアにおけるムスリム／キリスト教徒間関係の問題に応用する方法を検討することであった。

ファールキーの「メタ宗教」の概念は、比較宗教と宗教間対話にイスラーム

が寄与した重要な事例のひとつである。ファールキーの論理的な他宗教批判は、彼のキリスト教倫理批判の議論に見出すことができる。

発表では、「メタ宗教」の概念を用いて、マレーシアのキリスト教徒が神を「アッラー」と呼ぶことの是非をめぐる議論が分析された。発表者によれば、キリスト教徒は、神を「アッラー」と呼ぶ必然性をもたない上、キリスト教徒が神を「アッラー」と呼ぶことによって、ムスリムの基本的信条に混乱がもたらされる。そのため、結論として、宗教間の対立をあおらないためにも、キリスト教徒が神を「アッラー」と呼ぶ行為は禁止されてしかるべきであるとの見解が示された。

#### **松山洋平**

#### **Possibility of "Theology in a Land of Infidelity" in Islam: Focusing on Maturīdism**

(イスラームにおける「異教の地における神学」の可能性—マートゥリーディー学派を中心に)

マートゥリーディー学派神学は、「異教の地」における特殊な信仰論の可能性を模索するための有益な教義を内包している。ここで「異教の地」とは、イスラームの教義が知られておらず、その宗教実践も見られないような空間を指す。

マートゥリーディー学派の教説では、イスラームの宣教が到達していない人間にも、創造主の存在を理性によって推認する義務が課される。そのため、必然的に、「異教の地」に住む民の信仰がどのように成立するのかという問題が、同学派においては神学的に重要な問題となる。この点について同学派では、クルアーンや預言者などの基本的宗教簡条を知らず、宗教実践を一切行わない人間であっても、創造主の存在を信じさえすれば、それだけで全き「信仰者」とであると説かれる。この教義は、イスラームの世界観が共有されていない非イスラーム地域において、いかにイスラームを表象するのかという課題の発展に寄与する。

#### **Shafiq Flynn**

#### **Islamic Universalism and the Question of Governance: A Textual and Historical Analysis of al-Bīrūnī's *Kitāb al-Hind***

(イスラームの普遍性と統治の問題—ピールニー『インドの書』の文献学的・歴史



## 学的分析

本発表では、ビールニーが行ったヒンドゥー教研究の目的と方法論が考察された。

発表者によれば、ビールニーの著書 *Kitāb al-Hind* (インドの書) には、イスラームの普遍性の観点から他宗教を考察する方法が示されている。ビールニーはこの著作の中で、ヒンドゥー教の神学体系をイスラームにおける宗教類型論の枠内で研究しているが、その中で、ヒンドゥー教との対話と、共通性を模索する必要性を訴えている。彼は、ムスリムが他宗教の歴史や哲学体系を記述する方法論には、イスラームの普遍性を反映した改革が必要であると考えていたのである。

ビールニーのこの議論を通じて、発表では、宗教史研究における「他者」の問題について、特に、「他者」という概念を考察する方法、および、宗教と文化の境界の問題について検討された。加えて、ムスリムがヒンドゥー教について記述する際の問題点と、ムスリム／ヒンドゥー教徒間関係の発展史にも焦点が当てられた。

## 塩崎悠輝

### How to Categorize Non-Muslims in the Context of Islamic Jurisprudence?: Fatwas on Non-Muslims in Malaysian Society

## (イスラーム法学における非ムスリムの類型の問題—マレーシア社会に生きる非ムスリムに関するファトワーを例に)

本発表では、非ムスリムをイスラーム法学(フィクフ)に基づいて処遇する基準がテーマとされた。マレーシアでは、中国やインドから、仏教徒、キリスト教徒、ヒンドゥー教徒といった非ムスリムが移住してきたため、宗教間の関係が常に問題となってきた。宗教間の結婚や、宗教施設の建設、改宗、政治的権利といった宗教間の諸問題は、イスラーム法学で扱われる分野であるが、その一方で、各宗教コミュニティ間の関係は、政治、経済的な要因とも関連している。現実には、イスラーム法学の論理よりも、そのような影響や選挙における非ムスリムの投票を考慮して、政策的判断やイスラーム学者の教義回答(ファトワー)がなされることが多かった。発表では、そのような背景を踏まえた上で、非ムスリムに関する議論がどう変遷を遂げてきたのかが論じられた。結論として、マレーシアで公的に最も重視されているはずのシャーフィイー派法学の学説よりも、政治、経済的な都合が優先されていることが指摘された。

(東京外国語大学大学院博士後期課程 松山洋平)

## 公開講演会

### 真の平和を実現していくために

### —コプトが伝える聖家族のエジプト避難の旅と イスラームの聖遷(ヒジュラ)を通して考える

主催: 同志社大学一神教学際研究センター(CISMOR)

共催: 同志社大学神学部・神学研究科

【講師】久山宗彦(カイロ大学客員教授)

【日時】2013年6月8日(土) 13:00 - 15:00

【会場】同志社大学今出川キャンパス 神学館礼拝堂

久山氏はカイロ大学文学部日本語日本文学科の客員教授で、法政大学教授やカリタス女子短期大学学長などを勤めてきた方である。久山氏によれば、エジプトのキリスト教やイスラームを柱とする一神教の文化に対して、日本は多神教の文化であり、多様性を背景に和の文化を保ってきた。そのため両国は互いに基本的な発想が異なっており、お互いの文化

を知り合うことが両国にとって有益になるという。先の革命の後で新しい道が見えにくいなかで、どのように新しい社会を作り出していくかが、エジプト社会の第一の課題であろう。このような状況下にある日本学科のエジプト人学生にとっては、和でもって纏めていく日本の文化が新鮮であるという。

現在、エジプトの宗教はイスラームと





国民の10パーセント少々のコプト教である。エジプトは伝統を大事にする社会であり、実は三層の宗教文化をもっている。最初はファラオの時代である。その後でコプト教がエジプト全体の宗教となった。幼子イエスと母マリア、そしてヨセフ、それに乳母のサロメの聖家族がエジプトに逃れた時には、エジプトの住民たちは教化され、さらに聖マルコの宣教があり、エジプトのアレキサンドリアはキリスト教の一大拠点となった。そして7世紀にはイスラームが入ってきて、これが最大の宗教になった。

コプト教にとって聖家族のエジプト避難の旅は非常に大切な出来事である。ヘロデ王による幼子イエス殺害計画の難を逃れて聖家族は3年半にわたって避難の旅をつづけた。久山氏によれば、聖家族のエジプト避難の旅はムスリムにとってもヒジュラと重ねて受け取れる可能性のある出来事であるという。ヒジュラとは622年にムハンマドが同志と共に迫害の難を逃れてマッカからマディーナへ能動的に移動したという出来事であり、この年はイスラーム暦の元年となっている。このように、神の道を進んでいった聖家族のエジプト避難の旅とヒジュラの両者は、悪行を目論んでいる悪玉に対してアクティブに攻撃、抹殺して問題を解決していこうとする世の政治的指導者の、相手と同次元で抵抗（敵対）していこうとする態度とは正反対に、敵を許すがゆえに

相手に抵抗し懲らしめたいという自らの欲求と敢然と戦う、徹底した反-抵抗（敵対）という能動的な、従って平和的な態度を継続して取るのである。

聖家族のエジプト避難の旅、そしてヒジュラという視点から、真の平和への第一歩について考えることが出来ると久山氏は語る。現在も報復の論理が主流であるが、キリスト教、即ち、イエスは報復の論理を否定している。汝の敵を許し愛しなさい、という報復の論理とは正反対の姿勢がコプト教の根幹となっている。

エジプトでは多くの人はイスラームとコプト教は一体であると見なしている。先の革命の時には、クルアーンや十字架を頭上に掲げてムスリムとコプト教徒が共にデモに参加していた。また、デモの合間にムスリムが祈っている時には、コプト教徒が周りを囲って妨害がないよう監視していた。またポスターでは、十字架と新月を組み合わせる1つのエジプトを強調するものもあった。

今後の現代世界に見られる敵対行為については、相手と同次元で抵抗（敵対）するのではなく、精神的な武器をもって自らの欲求と戦っていく、精神的避難の方向に転化していくことが重要であろう。

（CISMORリサーチアシスタント 藤本憲正）

#### 第7回CISMORユダヤ学会議

## Jewish Cultural Creativity in Medieval Times and its Relations With Christian and Islam Traditions of Thought

（中世ユダヤ文化の創造力—キリスト教思想・イスラーム思想との関係）

主催：同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）  
同志社大学神学部・神学研究科

【日時】2013年6月29日（土）～30日（日）

【会場】同志社大学今出川キャンパス 神学館礼拝堂、神学館G31教室

公開講演会

## Medieval Jewish Cultural Creativity in Response to Persecution

（迫害への応答としての中世ユダヤ文化）



「中世キリスト教ヨーロッパにおけるユダヤ人」という言葉から連想される語が「不寛容」、「差別」、「圧制」であるように、ユダヤ人は暴力や追放という迫害を受けていた。改革派ユダヤ教のラビで歴史学を専門とするSaperstein氏は、11世紀の第一回十字軍によるラインラントのユダヤ人共同体の破壊、1391年のイベリア半島での反ユダヤ人暴動、1492年のスペインからのユダヤ人追放、1648年のポーランドでのコサック指導者ボフダン・フメルニツキーによるユダヤ人虐殺の4つの事件を取り上げ、それらに関する文献を(1)迫害を記録した年代記、(2)ユダヤ人社会に対する訓戒と叱責の文書という2つの分野に分けて、中世ユダヤ文化について講演を行なった。

#### (1)年代記

中世ユダヤ人は日常生活の記録には関心を持たず、知的活動と文化的創造性は聖書、タルムード、ミドラシュ等の分野で行なわれていた。しかし迫害に関しては後世への記録として年代記が作成された。年代記には破壊の様子が詳細に記録され、殉教と自らが家族を手を掛ける状況が描かれ、またユダヤ人を救った司祭などの記録も残されている。年代記作者は迫害は聖書に既に預言されていたと見て、否定的な聖句が成就したように、肯定的な復興やメシアの贖いも成就すると考えたのである。強い信仰のゆえにアブラハムがイサクを奉獻するよう神から試されたように、試練はその世代の罪深さではなく、信仰深さと勇猛さによって与えられたと主張しており、そこには迫害の原因を探究する試みはなかった。

#### (2)ユダヤ人社会への訓戒と叱責の文書

他方で、迫害に対して出来事を記録することよりも、むしろ因果関係に関心をもつ文書もあった。それらは、神がこの世のすべての出来事を支配しているとい

う神学的信条ゆえに、迫害も神の意志の表現であるとし、神の罰を引き起こすユダヤ人社会の欠陥を分析し、経済的社会的な原因をも探求した訓戒と叱責の文書である。これらの作者は、迫害は神との契約義務を果たさないユダヤ人に対する神の罰と見なした。たとえばユダヤ人は信仰と謙虚さを欠き、安息日を冒瀆し、外面的な儀式に満足して内面をおざなりにしている。ラビはタルムードの「瑣末な細部」に拘り、不毛な論議に没頭し、ギリシャ哲学に影響された説教や聖書注解をしている。支配者の寵愛を受けた宮廷ユダヤ人は、学問と勤勉さを忘れて虚栄に耽り、重荷は同胞に転嫁していると非難する。ユダヤ人は離散の民族の立場を忘れてキリスト教の王侯貴族のように振る舞い、高利によって土地と利益を手中にして大衆の怒りを買ったと語る。ユダヤ人の言動が迫害の原因となり、神は罰を課すための道具として異邦人を用いていると主張している。

これらの文書は地上のあらゆる出来事は神に支配されているという伝統的信仰態度、「信仰を保ち、伝統に戻れ、神の怒りは一時のものであり、悔い改めは神の愛を回復させる」という建設的なメッセージを与えている。そして中世のユダヤ人は信仰篤い人々だけでなく今日のユダヤ人と同様に矛盾と葛藤に満ちた社会に生きていたことを教えてくれる、と述べ、講演を締めくくった。その後会場から熱心な質疑が出され丁寧な応答がなされた。

(同志社大学神学研究科博士後期課程 飯田健一郎)



## 非公開研究会

【発表者】 Marc Saperstein (Professor, The George Washington University)

### Marc Saperstein

#### Medieval Jewish Cultural Creativity Influenced by Christian Models

(キリスト教的モデルに影響された中世ユダヤ文化の創造性)

キリスト教はヘブライ語聖書やマイモニデスを尊重し影響を受けているが、ユ

ダヤ教もキリスト教の影響を受けてきたことをSaperstein氏は以下のように提示した。

#### (1)悔い改め、告白、贖罪

十字軍の迫害がつづく12世紀末に登場したドイツの敬虔主義運動は、「悔い改め」を強調し、ラビ・ユダヤ教には元来存



在しない肉体苦行や告白形式を規定していた。これは信者への告白を定めた第四回ラテラノ公会議の時期と一致し、キリスト教の影響と見られる。

(2)身代わりの贖罪とメシア

メシアに対するキリスト教とユダヤ教の見解の相違は、メシアの受肉と身代わりの贖罪の教義に見られる。しかし神秘主義の書Zohar（ゾハル）には、ユダヤ民族から苦難を取り除くことがメシアの役割の一部とされ「身代わりの贖罪」の影響が見られる。

(3)聖書解釈

13世紀末から始まった聖書の四段階の解釈法（pardes）は、キリスト教の教義で用いられてきた解釈法を反映している。また当時の注解書は、エフタの娘の記事（士師記11章）で彼女は殺されずに世間から隔離されて生涯を送ったと解釈している。これはキリスト教の尼僧院の制度の影響と考えられる。

(4)説教への哲学的影響

15世紀頃の説教は、タルムードの伝統

的な思考法よりもアリストテレスやプラトン等の哲学的影響が大きく、三段論法やスコラ哲学の「論題討論」形式を用いるようになっていた。

(5)規範の対象

キリスト教の礼拝や生活習慣と比べたユダヤ教徒の自己批判である。礼拝中の居眠りや私語への注意を喚起し、誠意や正直さ、公平さをキリスト教徒に見習うべきであると主張している。

ユダヤ教徒はキリスト教世界から排除と迫害だけを受けていたのではなく、相互に相手から学ぶ創造的な交流があり、ユダヤ教はこの開放性によって生きつづけることができたとSaperstein氏は語った。この発表に対してDoron B. Cohen氏（同志社大学、講師）からコメントがなされ、その後出席者の間で活発な議論が展開された。

（同志社大学神学研究科博士後期課程 飯田健一郎）

非公開研究会

【発表者】神田愛子（同志社大学博士後期課程）

法貴遊（京都大学博士後期課程）

Daniel Davis (Research Associate, Cambridge University Library)

仁子寿晴（同志社大学講師）

研究会は2つのテーマで行われ、第1部は“Aspects of Jewish Medieval Thought: Maimonides”（中世ユダヤ思想の諸相—マイモニデス）をテーマに2名の博士後期課程の学生が発表し、第2部は“Jewish Culture Encountering Muslim Thought”（ユダヤ文化とイスラーム思想の出会い）をテーマに2名の若手研究者が発表した。

神田愛子

**Cosmology of Maimonides: Examining the Difference from Greek and Islamic Thought**  
（マイモニデスの宇宙観—ギリシアとイスラーム思想との比較において）

天文学は古代ギリシアで幾何学の発展に伴い進展し、プトレマイオスの地球中心仮説はコペルニクスに至るまで支配的見解であった。古代ギリシアの文献は9世紀から13世紀にかけアラビア語に翻訳され、天文学はイスラーム世界が牽引した。ユダヤ人はそれらをさらにヘブライ語やラテン語に翻訳し、ラテン世界との橋渡し役となっ

た。中世の哲学思想はアヴェロエスやアヴィセンナらによるアリストテレス註解が中心を占めたが、それは新プラトン主義の影響を受けている。マイモニデスの宇宙観も新プラトン主義の影響を受けているが、そこにはユダヤ伝統も色濃く反映されている。新プラトン主義的要素はファーラービーやイブン・バッジャの著作を通して入ったものと推察できるが、具体的にどこからどのような影響を受けたかを探るのは次の研究課題である。

法貴遊

**The Generic Form and the Specific Property in Maimonides' Medical Literature and Guide of the Perplexed**

（マイモニデスの医学文献と『迷える者の手引き』における種の形相と特性）

特性は四元素の混合から説明不能な薬品の作用である。アヴィセンナはこれを種の形相による作用と主張、四元素の混合は形相生成の作用因ではなく、種の形相が生じ



るには神的流出が必要とした。一方、アンダルの医師の多くは、特性は物質間の適合による吸引作用だと主張した。マイモニデスはアヴィセンナと同様、特性を種の形相による作用と見、混合で説明不能な変化は形相から生じ、形相による変化は形相付与者が必要とした。彼はアンダルの医師の経験知を評価するが、この点はアヴィセンナの哲学的観点を受容する。彼がこの語をアヴィセンナの*Al-Qānūn fī al-ṭibb* (医学典範) から得たのかは不明だが、これはアヴィセンナ抜きのアヴィセンナの知識である。当時、この語がどの程度共有され、マイモニデスがこの知識をユダヤの医師にどう伝え、医学思想と実践に影響を与えたかは研究の必要があろう。

#### **Daniel Davis**

#### **The Past Eternity of Time: A Maimonidean Response to Avicenna**

(過去の方角における時の永遠性—アヴィセンナに対するマイモニデスの応答)

アヴィセンナの見解は、マイモニデスがアリストテレスの見解としたものと同じである。マイモニデスは、創造は時間的でなく無時間的であり、世界創造の前に時はなく、時は存在する事物と共に創造されたと主張する。一方、アヴィセンナは、時は過去において無限に存在し、時間的に先行するものに時間的始めはなく、無限の時間はあり得るがそれは可能無限で実無限ではないという。問題は、マイモニデスが神の意志は神の知恵であり、神の意志と知恵は変化しないと語っていること、すなわち、神の意志は時間的ではないことであろう。彼は創造を、奇跡や預言、神意、神の個の知識と繋げて考える。神の知恵は神の意志であるが

ゆえに、奇跡は神の意志に関わり、科学は普遍を扱うがゆえに、奇跡は人間の知識に近づき得ない。人の知は個々の事物において無謬でなく、それは神のみが有するのである。

#### **仁子寿晴**

#### **Eastward Advance of Andalusian Jewish-Muslim Culture from the 12th Century onward: Toward a New Vision of Islamic Thought**

(12世紀以降アンダルのユダヤ—イスラーム文化の東漸—イスラーム思想史の新たなビジョンを求めて)

11世紀に至るまで、イスラーム圏の文化的中心は東方のダマスカスやバグダッドにあり、西方のアンダルスやマグリブは学的知識を東方から受け入れてきた。12世紀、サラゴサ王は哲学者を、トレド王は科学者を、セヴィリア王は詩人を援護したことで西方の学問が活発化し、翻訳を通じてそれらは欧州に流出、東方のシリアやペルシャにも影響を与えた。西方の科学の発展はサーイド・アル=アンダルーシーの*Kitāb ṭabaqāt al-umam* (諸国の分類) から知られ、アル=キフティーとイブン・アビー・ウサイビアはさらにマイモニデスの名を加えた。マイモニデスは著作の大半をカイロで執筆したが、これはアンダルの知識の伝播でもあった。アンダルの天文学はマムルーク朝の天文学者に影響を与え、13世紀にペルシャに設置されたマラガ天文台にはアンダルの天文学者も参加した。

(同志社大学神学研究科博士後期課程 神田愛子)



#### 公開講演会

## Maimonides' Monotheism

### : Between the Bible and Aristotle

(マイモニデスの一神教—聖書とアリストテレスの間で)

【講師】 Warren Zev Harvey (Professor, Hebrew University)

Zev Harvey氏による講演は、マイモニデスの4つの著作、*Kitāb al-Sirāj* (*Perush ha-Mishnayot*, ミシュナー註解)、*Kitāb al-Farā'id* (*Sefer ha-Mitsvot*, 戒律の書)、

*Mishneh Torah* (ミシュネー・トーラー)、*Dalālat al-hā'irīn* (*Moreh Nevukhim*, 迷える者の手引き)を通して、彼の一神教の理念の展開を考察するもので



あった。

モーゼス・マイモニデスは1138年にイスラーム統治下のコルドバで生まれ、1204年にフスタート (Old Cairo) で亡くなった。一神教という問いは、マイモニデスの生涯においてユダヤ人としてだけでなく哲学者としても重要な問いであった。

まず、一神教に関する彼の最初の見解は、1168年にユダヤ・アラビア語で記された*Kitāb al-Sirāj*の中に見出される。「損害篇・サンヘドリン巻序」第10章(天命章)13原理(信仰箇条)では、神の存在が他に類似するものがないという意味で「一」であることが述べられている。*Kitāb al-Sirāj*での、マイモニデスの神の唯一性とは以下の2つのアプローチによって説明される。(1)神の非物体性(incorporeality)を論じる際はアリストテレスに基づくものであり、(2)神の無比性(incomparability)を論じる際は、聖書的側面を強調している。このような哲学的説明と聖書的説明の二本柱によって神の唯一性を説明する試みが、マイモニデスの特徴である。

次にユダヤ・アラビア語で1169年頃にフスタートで執筆された*Kitāb al-Farā'id*の中には、2番目の戒律として、神が唯一であるという認識について言及されている。しかし一神教の定義はされておらず、神の非物体性や無比性に関しても言及されていない。

3つ目の著作、1178年にヘブライ語で記された*Mishneh Torah*は14巻からなるユダヤの法典であり、フスタートで執筆された。この著に収められた「知識の書」の「トーラーの根本原理」(1:7-8)の中で、マイモニデスは申命記(6:4, 4:15)、イザヤ書(40:25)などを引き合いに出し、神の唯一性について論じる。アリストテレスの「一」に関する様々な説明(例:物理学的な説明)に関しても考察しているが、マイモニデスは神の非物体性に関してアリストテレスに言及するだけでなく、聖書(申命記4:15, 4:39)からも神の非物体性の証明を試みている。一方、聖書が強調する神の無比性に関してはイザヤ書(40:25)を引用している。*Mishneh Torah*に見られる神の唯一性は、ギリシア的要素とヘブライ的要素が融合していることがわかる。マイモニデスは神の唯一性が非物体的であると同時に無比性であるという証明を試みた。

哲学的著作である*Dalālat al-hā'irīn*はユダヤ・アラビア語で執筆され、1190年頃にフスタートで完成された。この書では神の唯一性はアリストテレス的に述べられている箇所(Ⅱ, 1-2)がある一方、別の箇所(Ⅱ, 4)では、神の非物体性というアリストテレス的な概念よりも神の無比性という聖書的な概念が優先されている。最終的にマイモニデスがどのような立場であるのかは不明である。また*Dalālat al-hā'irīn*では「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である」(申命記6:4)は一度しか引用されていない。その引用箇所とは、Ⅲ, 45の神と天使の関係を論じる一節である。*Dalālat al-hā'irīn*におけるマイモニデスの議論からわかることは、(1)神は唯一であり多ではないこと、天使は非物体性であるが多数であること(申命記6:4)、(2)神は唯一であり比べられないこと(イザヤ書40:25、エレミヤ書10:6)である。仮に(1)はアリストテレス的であり、(2)はヘブライ的であるといえるならば、マイモニデスは最も純粋な一神教はモーセやアリストテレス(非物体性)の内に見出されるものではなく、むしろイザヤやエレミヤ(無比性)の中に見出されると主張するかもしれない。

アリストテレスのギリシア的一神教とイザヤのヘブライ的一神教との間における道德あるいは宗教の違いとは何か。もしこの問いに答えられるならば、マイモニデスが一神教を緻密に考察した際、アリストテレスだけでも、イザヤだけでもなく、すなわち哲学者と預言者の両方にその基礎を求めた理由がわかるだろう。

(同志社大学神学研究科博士後期課程

大岩根安里)



**Warren Zev Harvey**

**Maimonides on the Meaning of ‘Perplexity’ (*ḥayra* = *aporía*)**

**(マイモニデスにおける「当惑」 (*ḥayra* = *aporía*) の意味)**

研究会では、Zev Harvey氏により、マイモニデスの哲学的著作 *Dalālat al-hā'irīn* (*The Guide of the Perplexed*, 迷える者の手引き) の表題に掲げられている“perplexity” (*ḥayra* = *aporía*) の意味に関して考察が行われた。

アラビア語の“*ḥayra*”は、中世の哲学的著作の中でギリシア語の“*aporía*”の訳として用いられた。“*aporía*”の語源は、「道のないこと」、「行き詰まり」を指し、また解決法が見出されない難題に当惑している状態をも表す。

氏は、マイモニデスが *Dalālat al-hā'irīn* の中で想定した“perplexity” (*ḥayra* = *aporía*) の状態にある者、つまり「迷える者」を考察する上で、以下の5つの異なる例を提示した。

(1) ヨセフ・ベン・ユダの例：ラビ・ヨセフ・ベン・ユダはまだ物理学に関する学習が完了していない段階で、師であるマイモニデスに形而上学ひいてはトーラーの秘義を学びたいと懇願した。しかし、十分な知識を伴っていない彼の性急な知の欲求は“perplexity” (以下、「当惑」) をもたらすものであると判断される。(2) 聖書に含まれる語句の中には比喩的な表現が含まれていることを知らぬ読者 (例: 「主の手」出エジプト記9:3)、(3) 聖書にみられる物語はアレゴリーが含まれていることを知らず逐語的に読もうとする読者 (例: 創世記3章でヘビが会話をすることは自然学の知識と矛盾する)、これら(2)と(3)の例は信仰と理性に関わる「当惑」に陥る。(4) 物理学と天文学との間の矛盾に悩まされる者: マイモニデスはこれを「真の当惑」とする。「真の当惑」とは信仰と理性の矛盾の結果に起因するのではなく、物理学と天文学の矛盾に起因している。マイモニデスは、アリストテレスに関して、彼が問題を認識するための十分な数学の知識を有していなかったため、実際は「真の当惑」から免れたと結論づける。(5) マイモニデス自身: 彼は物理学と天文学の間に生じた科

学の危機を解明できない。

以上、「迷える者」の5つの異なる例を挙げたのち、Zev Harvey氏は *Dalālat al-hā'irīn* が誰に向けられて執筆されたのか、という問いに戻る。*Dalālat al-hā'irīn* はヨセフ・ベン・ユダに向けて書かれたものであることは明らかであるが、別の回答も存在する。氏の見解によると、聖書を読む際にメタファーやアレゴリーを理解することを未だ学んでいない若い読者も「迷える者」の対象とされる。さらに偉大な哲学者であるアリストテレスのような教養のある哲学者でさえ、時として「迷える者」となるのだ。そのうえ「迷える者」の道案内人としてのマイモニデス自身でさえも、非常に当惑した状態に陥ることを認めていた。

プラトンやアリストテレスが、哲学することは「当惑」に始まり「当惑」に終わると述べたように、哲学者は「当惑」から逃れることはできない。哲学者とは継続的に「当惑」の状態にさらされることを意味し、絶えず「当惑」に立ち向かう者のことである。その意味で *Dalālat al-hā'irīn* は、哲学者の手引きといえるだろう。最後に氏は、*Dalālat al-hā'irīn* における2つの意味を提示した。つまり、それは「迷える者」のために書かれたものであり、且つ「迷える者」によって書かれた手引きである。いいかえれば、*Dalālat al-hā'irīn* は哲学者のために書かれたものであり、且つ哲学者によって書かれた手引きであり、さらに哲学に関する手引きなのである。

つづいて、高木久夫氏 (明治学院大学准教授) によるコメントがなされ、その後、参加者を交えての活発な議論が展開された。議論の内容は *Dalālat al-hā'irīn* における理性と啓示の相克の位置づけ、中世の文脈における聖典解釈や翻訳の問題など多岐にわたるものであった。

(同志社大学神学研究科博士後期課程

大岩根安里)



## 2013年度前半 活動報告

### 主催イベント

#### 【国内開催】

#### 2013年6月8日(土)

##### ▼公開講演会

「真の平和を実現していくために—コプトが伝える聖家族のエジプト避難の旅とイスラームの聖遷(ヒジュラ)を通して考える」

講師：久山宗彦(カイロ大学文学部客員教授)

コメント：石合力(朝日新聞国際報道部長、CISMORリサーチ・フェロー)

会場：神学館礼拝堂

#### 2013年6月29日(土)～30日(日)

#### 【第7回CISMORユダヤ学会議】

「Jewish Cultural Creativity in Medieval Times and its Relations With Christian and Islam Traditions of Thought (中世ユダヤ文化の創造力—キリスト教思想・イスラーム思想との関係)」

<6/29>

##### ▼公開講演会

「Medieval Jewish Cultural Creativity in Response to Persecution (迫害への応答としての中世ユダヤ文化)」

講師：Marc Saperstein

(ジョージ・ワシントン大学教授)

会場：神学館礼拝堂

##### ▼非公開研究会

「Medieval Jewish Cultural Creativity Influenced by Christian Models (キリスト教的モデルに影響された中世ユダヤ文化の創造性)」

発表：Marc Saperstein

(ジョージ・ワシントン大学教授)

コメント：Doron B. Cohen (同志社大学講師)

会場：神学館G31教室

<6/30>

##### ▼非公開研究会

発表：神田愛子(同志社大学神学研究科)

法貴遊(京都大学文学研究科)

Daniel Davies (ケンブリッジ大学図書館研究員)

仁子寿晴(同志社大学講師)

会場：神学館G31教室

##### ▼公開講演会

「Maimonides' Monotheism: Between the Bible and Aristotle (マイモニデスの一神教—聖書とアリストテレスの間で)

講師：Warren Zev Harvey (ヘブライ大学教授)

会場：神学館礼拝堂

##### ▼非公開研究会

「Maimonides on the Meaning of 'Perplexity' (ḥayra =aporía) (マイモニデスにおける『当惑』(ḥayra =aporía)の意味)」

発表：Warren Zev Harvey (ヘブライ大学教授)

コメント：高木久夫(明治学院大学准教授)

会場：神学館G31教室

#### 2013年7月20日(土)

##### ▼公開講演会、非公開研究会

「Moderate Islam and the Role of Civil Society Movements in Emerging Economies: A Case of Muhammadiyah in Indonesia (新興国における穏健イスラームと市民社会運動の役割—インドネシアのムハンマディーヤを事例に)」

講師：Din Syamsuddin

(国立イスラーム大学ジャカルタ校教授/インドネシア・ムハンマディーヤ総裁)

会場：神学館礼拝堂

共催：博士課程教育リーディングプログラム:グローバル・リソース・マネージメント (GRM)

#### 2013年9月21日(土)

#### 【第2回宗教における価値観をめぐる合同会議】

「宗教的伝統と近代的価値の対立と合意 (Conflict or Consensus among Religious Tradition and Modern Values)」

##### ▼公開講演会

「Concept of Justice in Judaism and Islam (ユダヤ教とイスラームの正義の概念)」

講師：Mohamed Hawary (アインシャムス大学教授)

「宗教的価値観と現在エジプトのヒジャーブ観」

講師：Hanan Rafik Mohamed (カイロ大学准教授)

「日本宗教は近代的価値とどのように向き合ってきたのか—ポスト世俗主義時代への教訓」

講師：小原克博(同志社大学教授、CISMORセンター長)

コメント：塩崎悠輝(同志社大学助教)

会場：神学館礼拝堂

##### ▼非公開研究会

発表：Amal Refaat (カイロ大学講師)

Saeed Atiah Aly (アル・アズハル大学教授)

Naglaa Rafat Salem (カイロ大学助教)

四戸潤弥(同志社大学教授)

会場：神学館G31教室

共催：カイロ大学オリエン特研究センター



## 【海外開催】

### 2013年8月12日(月)

- ▼国際セミナーin アメリカ、ワシントンD. C.  
「Japanese Domestic Politics and Foreign Policy after the Upper House Election」  
講師：村田晃嗣(同志社大学学長、CISMORリサーチ・フェロー)  
会場：アメリカ、マンスフィールド財団  
共催：The Maureen and Mike Mansfield Foundation、日米研究インスティテュート(USJI)



8月12日国際セミナー

## 共催イベント

- 【博士課程教育リーディングプログラム：  
グローバル・リソース・マネジメント (GRM) 】

### 2013年5月10日(金)

- ▼公開講演会  
「Social Activity of Nahdatul Ulama: Coexistence of Plural Communities through Empowerment of Local Communities (ナフダトゥール・ウラマーの社会活動—地域社会への支援を通じた多元社会の実現)」  
講師：Salahuddin Wahid  
(ナフダトゥール・ウラマー(イスラム団体)、指導者)  
会場：同志社礼拝堂



5月10日公開講演会

### 2013年6月8日(土)

- ▼公開講演会  
「Arab Spring and the Democratization Process in the Middle Eastern Countries」  
講師：Wadah Aref A Khanfar (Al-Sharq Forum 代表)  
会場：神学館礼拝堂



6月8日公開講演会

### 2013年7月9日(火)

- ▼公開講演会  
「Nihilism and Islam(ニヒリズムとイスラーム)」  
講師：Mustapha Kamal Pasha  
(英国アバディーン大学教授、同志社大学客員教授)  
会場：志高館SK118

### 2013年9月27日(金)

- ▼講演会・専門家会議  
「トルコとエジプトの民主化の(過程)比較(Comparison of the process of democratization in Turkey and Egypt)」  
講師：Taha Özhan  
(政治経済社会研究財団(SETA) アンカラ理事長)  
会場：志高館会議室

## 出版物

- ▼『一神教学際研究(JISMOR)』8  
特集：中国における宗教—一神教に焦点をあてて
- ▼『一神教世界』4
- ▼『CISMORユダヤ学会議』6  
ヘブライ語文化の復興—現代ユダヤ教における意義・日本文化との関係
- ▼『CISMOR・Leo Baeck College国際共同ワークショップ報告書』 Land and People in Jewish Writings and Their Interpretations (ユダヤ文献における「地と民」とその解釈)

## 来訪者記録

### 2013年5月

Ali-Reza A'arafi

アルムスタファー国際大学、President (イラン)

M J Elmi

The Islamic College、Principal (イギリス)

Majeed Hakim-Elahi

アルムスタファー国際大学、

Vice President for Relations and International Affairs  
(イラン)

澤田達一

アルムスタファー国際大学在日事務所、研究教務部長

### 2013年6月

Daniel Davies

ケンブリッジ大学図書館、研究員 (イギリス)

久山宗彦

カイロ大学文学部、客員教授

Marc Saperstein

ジョージ・ワシントン大学、教授 (アメリカ)

Warren Zev Harvey

ヘブライ大学、教授 (イスラエル)

### 2013年7月

Din Syamsuddin

国立イスラーム大学ジャカルタ校、教授/インドネシア・ムハンマディーヤ総裁(インドネシア)

### 2013年9月

Amal Refaat

カイロ大学、講師(エジプト)

Gamal Abd El Samea El Shazly

カイロ大学、オリエント研究センター長/教授(エジプト)

Hanan Rafik Mohamed

カイロ大学、准教授(エジプト)

Mohamed Hawary

アイン・シャムス大学、教授(エジプト)

Naglaa Rafat Salem

カイロ大学、助教授(エジプト)

Saeed Atiah Aly

アル・アズハル大学、教授(エジプト)

CISMOR最新情報を発信中です

<http://www.cismor.jp>

過去の公開講演会の動画ほかニュースや出版物などがご覧いただけます。

発行 同志社大学一神教学際研究センター(CISMOR) TEL 075-251-3972 FAX 075-251-3092  
〒602-8580 京都市上京区今出川烏丸通東入 E-mail info@cismor.jp  
編集 CISMOR事務局編集部 デザイン 高田太